5

兵士が学んでいた包帯法に関する知識と技術
――明治7年発行『三角繃帯用法』より――

鈴木　紀子
東京女子医科大学病院看護部

はじめに

陸軍軍医学校編纂『陸軍軍医学校五十年史』には「明治五年制定陸軍会計看護卒用医療背嚢」について「本医療背嚢ハ明治五年隊附軍医官ノ下ニ属セシ陸軍会計看護卒（現今ノ看護兵）ニ携帯セシメタルモノナリ」と説明文があり，内容品目も明示されている．その内容品目の一つに「三角巾白布」がある．明治7（1874）年8月，陸軍文庫から三角繃帯と共に兵士が携帯できるように小冊子『三角繃帯用法』が出版された．『三角繃帯用法』に書かれている内容を検討し，明治7年当時の陸軍兵卒が学んでいた包帯に関する知識と技術を明らかにする．

1. 本書の作成目的

ドイツ人「シセル」が口授したものを軍医試補多納光儀が記したものを和訳し，陸軍軍医土岐頼徳が一冊の小冊子として作成．ドイツの名医「エスマルク」の伝えた三角繃帯の用い方をもとに，外傷の種類や負傷部位に応じて工夫を凝らして編み出された使用方法が書かれており，戦争の危急の際に軍医が不足した時には，兵士が互いに三角繃帯を用いて処置が施せるように方法を示したものである．実際に明治3（1870）年の普仏戦争の際，ドイツの兵士が三角繃帯の用い方を平生より訓練していたことで大いに役立ったという教訓から，日本の兵士も平素より之を身に付けておくことは治療の手助けとなるだけでなく軍医が不在のときも補うことが出来るという考えのもとに作成された．

2. 内容

1）戦場に出るときの兵士の心構えと所持品（長け五尺二寸の繃帯，海綿一筒，少しの面撒糸，三角巾）
2）三角巾の便利さと活用方法
3）銃創に対する処置方法
4）外傷の種類，負傷部位に応じた三角巾の用い方，骨折患者の処置方法

特に銃創に対する処置方法に関しては，貫通した傷に対する処置の用意として，綿撒糸を二個或は綿を三角巾の中に巻き込んでおくこと，石炭酸一分と脂膏十分でつくった膏薬と綿撒糸を束ねたものを塗った紙に包むと塗ったものに繃帯が傷に張り付くのを防ぐと共に傷口を腐らせるのを防ぐことなど，銃創の特徴と其の処置方法が具体的に書かれている．また，腫脹部位対する寒罨法の方法は「看病卒であれば皆心得居れり」とあり，看病卒が身につけていた技術も知ることができる．

考察

『三角繃帯用法』には，戦場で兵士が負傷し苦しむときは速やかに手当て（程よき療治）を行い，救うために必要な心構えと具体的な手当の方法が書かれており，繃帯は慣れた者でなければ使用できないが，三角巾は簡易のため素人にも学びやすいとされている．

明治政府は近代化を目指し，富国強兵，医療の西洋化の実現に向け制度の整備に取り組み，『三角繃帯用法』が出版された明治7年当時は強い軍隊作りを目指し徴兵令の制定に続き教育システムが整備され始めた時期である．また医療においてはドイツ医学の採用が決まり，明治4年にドイツ人陸軍軍医少佐レオポルド・ミュルレル，海軍軍医少尉テオドール・ホフマン両氏を招聘してドイツ医学の普及に向けて歩み始めた時期であるが，西洋医学を学んだ医師が少なく軍隊では軍医の確保に困難を極めていた時期である．そのような背景のもと，陸軍内部では看護制度がシステムとして整備され始めた．

陸軍では明治8（1875）年に看護要員全般用として『陸軍扶卒須知』を作成した．これは日本における先駆的看護教科書といわれているが其の前年に発行された『三角繃帯用法』の内容は看護兵に求められた能力の基本となったと考えられる．戦場での治療効果を挙げるための陸軍の取り組みを知る上でも『三角繃帯用法』の内容は需要である．